2014年度神戸短歌祭　兵庫短歌賞決まる！

総会・歌合せ開催

（於）県民会館
パルテホール

会報

第191号

題字出口草露
発行者　〒679-5322佐用郡佐用町上石井685　安藤直彦方
兵庫県歌人クラブ会計　〒655-0039神戸市垂水区霞ヶ丘5-1-14　池本登代子
振替　01110-5-6903
印刷所　㈱甲南堂印刷

兵庫短歌賞
桂　保子さん（未来）
青田綾子さん（文学圏）
新人賞
種田淑子さん
奨励賞
西塚洋子さん（象の会）

深く静かに熱い戦いの壇上

恒例の神戸短歌祭は、4月29日風雨の強い不穏な天候のもと、県民会館パルテホールで開催された。総合司会生田よしえ氏の開会宣言、安藤直彦代表の挨拶に続いて、兵庫短歌賞及び新人賞の贈呈式が行われた。

兵庫短歌賞は、従前の新人賞という枠には納まりきらない優れた才能を顕彰するために新たに設けられたもの。

兵庫短歌賞受賞者は「白い小さなドア」の桂保子氏と「限界集落」の青田綾子氏。新人賞には「青い錠剤」の種田淑子氏、奨励賞には「雪暗れ」の西塚洋子氏が選ばれ、夫々安藤代表から賞状が授与された。受賞者各氏の喜びの言葉に続いて、選考委員長の中川昭氏より選考経過の報告があった。応募された49作品はいずれもレベルが高く慎重に審議された経過を詳細に述べられ、受賞作品についての懇切な選評を得、選には漏れたが注目に値する作品にも触れて今後の精進を期待する言葉で締め括られた。

授賞式の後、議長に高井忠明氏を選出して、兵庫県歌人クラブ平成26年度総会が開催された。安藤代表から25年度事業報告、池本登代子会計による決算報告、小畑庸子幹事の監査報告を得て報告はすべて承認された。続いて26年度事業計画案の提案と各事業への協力要請があった。結社を超えた横のつながりを強固にし、短歌という伝統文化を若い世代に引き継ぐという安藤代表の気概と決意に溢れた提案であり、満場一致で承認可決し総会終了。

右より桂氏、青田氏、種田氏、西塚氏

休憩の後に、神戸短歌祭のメインイベントである「歌合せ」が始まった。舞台中央に司会の尾崎まゆみ氏と判者の大辻隆弘氏、歌びとは左に紅組の小畑庸子、楠誓英、廣庭由利子、田中幹、渡邊大貴の5氏。右に白組の田岡弘子、岩尾淳子、南輝子、武富純一、上條翔太の5氏が並ばれる。20代から80代まで、各世代を代表する豪華メンバーである。舞台袖には山田麦氏と森嶋郁子氏が控え、朗詠と記録を担った。

「神」「戸」「短」「歌」「祭」の5文字を題に詠まれた作品が両組から1首ずつ澄んだ山田氏の声で披講される。夫々の作品について両組の歌びとによる丁々発止のやり取りと賛否表決の末に、判者大辻氏の最終判定が出る。勝敗の結果も然りながら、尾崎氏の軽妙で的を射た司会進行のもと、評者夫々の作品の読み、語句へのこだわり等世代の違いも垣間見せながら忌憚のない発言が続き、示唆に富んで興味深いものであった。最終白組の3勝1敗1分けで終わったが、非常に濃密な内容で、壇上の諸氏のみならず、企画立案準備に当たられたスタッフの皆様のご苦労がしのばれるよい催しであった。

前田副代表の閉会の辞により午後4時過ぎに散会。参加者は120名余。散会後参加者36名による懇親会がもたれた。

（中島貫喜子）

（「歌合せ」の詳しい内容は(2)～(5)ページに記載。）

神戸短歌祭「歌合せ」記

小林幹也

２０１４年神戸短歌祭「歌合せ」は、判者に、著書『アララギの脊梁』などの評論活動によって歌壇に確固たる地位を築いてきた大辻隆弘氏をお招きして行われた。

歌合せを始めるにあたり、挨拶に立った安藤直彦代表から、去年はシンポジウムを行ったが、今年は年齢を越えて楽しめるものとして、歌合せを選んだという言葉が出たが、まさに、今回の歌合せは、そのような形で、人選、配置されたといってよい。方人には小畑庸子氏、田岡弘子氏といった兵庫県歌人クラブの幹事でもある大ベテランの歌人、それから、上條翔太氏、渡邉大貴氏といった今年大学を卒業したばかりの若々しいメンバーが並んだ。

また読師、つまり壇上の進行役をつとめる尾崎まゆみ氏は、去年の暮れに第六歌集『奇麗な指』を刊行したばかり。方人の楠誓英氏も去年の暮れに第一回現代歌人短歌賞を受賞。今年に入ってからは方人の廣庭由利子氏が第一歌集『黒耶采芽戸』、小畑庸子氏が第九歌集『白い炎』を刊行している。最近話題を集めている人たちが壇上に集結し、そうそうたる布陣といった感があった。

歌合せに先立って、読師の尾崎まゆみ氏から、歌合せは歌の読みを楽しむ場だという趣旨の言葉があった。実際、今回の歌合せでは、一首の歌についてさまざまな読みが提示され、充実した場になった。

壇上に並んだ歌人たちの紹介を総合司会である私、小林幹也が行ったのち、歌合せが開始された。

兼題は「神」「戸」「短」「歌」「祭」。講師、すなわち歌の朗詠を行うのは、山田麦氏である。艶やかな張りのある声で、一番「神」の歌が紹介された。（各作者名は歌合せ終了まで伏せて行われる。）

（紅組）

「湖の底の桜木芽ぶく」神の声伝へむと来つ天道虫は

小畑庸子

（白組）

漕ぎ止めてなおも自転車すむとき背中に感じる神の手のひら

武富純一

紅組の歌は、湖の底に神の宮殿があって、そこに桜木が芽ぶくという幻想的なイメージがひろがる魅力的な歌である。泉鏡花の『海神別荘』を思わせるという意見も出された。逆に、現実的に見れば、ダム湖に沈んだ村のことだとも捉えられるが、いずれにせよ、その芽ぶきを、天道虫という小さくても「天」という字のついた虫が、神の代弁者のごとく伝えにくるという発想の豊かさが評価された。

しかしその一方で、題材を詰め込み過ぎ、一首が舌足らずな印象を与える、たとえば歌の上句「　」のあとに本来であれば「という」という言葉が入るべきところ、それがないので、やや唐突な感じで、捉えにくい、という意見も出された。

明石短歌会

明石公園内会議室
毎月第一・三木曜日

連絡先　田岡弘子
〒673－0845　明石市太寺四ノ一ノ三〇
☎（〇七八）九一二－一二六七三

尼崎歌人クラブ

会長　中野昭子
副会長　兎田孝子

事務局（連絡先）
〒661－0014　尼崎市上ノ島町二－二－十一
佐々木春美
☎（〇六）六四二六－〇一一八

「ゑちうど」の会

代表　上田一成

☆個々の言葉を大切にする場

石田　勝啓　　内海サチ子
高田　澄子　　寺田　紘子
志田　　栄　　菅野　仁孜
塚本　誠子　　時里　直子
松田津也子　　三木とし子
栗田　明代　　山田　　文
山之内順子　　上根美也子

〒671-1211　姫路市勝原区熊見296－9
上田方　TEL･FAX(079)236-6806

芦屋水甕短歌会

歌会（ＰＭ１:30～４:00）
第２土曜日（芦屋市民会館）
第４金曜日（谷崎潤一郎記念館）

・連絡先 〒659-0026 芦屋市西蔵町６-22
☎(0797)31-7220
藤井幸子方
・事務局 〒659-0012 芦屋市朝日ヶ丘町16-34
☎(0797)31-5573
石井佳子方
近くの方の御参加歓迎します

淡路歌人クラブ

顧問　浜田悦子
荒田水池務
来昭男
清谷島さえ
代表・事務局長　浜田悦子
副代表　荒田水池樹
来谷島子
清谷島英
会計　前田陽

〒656-0651　南あわじ市伊加利1062
TEL･FAX(0799)39-0835

奥播磨短歌会

代表　西川洋子

〒679－1203
多可郡多可町加美区多田435
☎(0795)35－0489

それに対して、白組の歌は、韻律がよく、しかも平明な言葉を用いていて、分かりやすい。おそらくは自転車で下り坂にかかり、こがなくても前に進んでいく状況を歌にしたものだろうが、そこに「神の手のひら」を感じるとしたところに作者のこころのあり様が出ている。ごく当たり前のことを詠みながら、まるで宇宙のエネルギーと一体となっているかのように感じさせるところに評価が集まった。

大辻氏の判もその点をふまえ、さらにこの「手のひら」にふわっとした弾力を感じさせるところを評価し、白組の歌の勝とした。

次は「戸」の歌である。

（紅組）
消印や宛先のなき御手紙の
戸棚の奥にありや少女期
渡邊大貴

（白組）
しやりしやりと舎利骨片の
やうな音させて喪の戸へ銀
河ふりしく　南輝子

紅組の歌で注意を引いたのは、「御手紙」と「手紙」の上に「御」が付いていることである。自分が書いた手紙に、「御」をつけるのは不自然である。ここから、作者は、かつて好きだった少女が、自分あての手紙を出さないでそのまま持っている状況をナルシスティックに妄想しているのではないか、という読みがなされた。

しかしその一方、この現代的な内容にしては、一首の言葉の調子が古臭く、硬いことに疑問が呈された。

それに対して、白組の歌は「しやりしやり」という音から「舎利骨片」と言葉の調子がなだらかに導き出されてくるところが巧みであるとして注目された。また死と宇宙の組み合わせは、稲垣足穂の『弥勒』の世界や、宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』の世界を連想させ、そこからこの「しやりしやり」というオノマトペは、車輪の音をもかけているのではないか、という意見も出された。

これらの意見をふまえ、大辻氏の判は、白組の歌の勝。

続いて「短」の歌。

（紅組）
ケイタイの画面閉ざせば暗
闇に冬虹短くかかりてゐた
り　楠誓英

（白組）
春の馬駆けゆく空ゆ雨は来
てみじかいあいだ道を濡ら
せり　岩尾淳子

紅組の歌について、希望が少ししかないのか、少しだけならあるのか、どちらを強調させたがっているのかは定かではないが、いずれにせよ、この絶望感には、切なさが伴っていて迫力があるという好意的なコメントが寄せられた。また『真夜中の虹』という失業者を描いたフィンランド映画を思わせるという意見も出された。

その一方、携帯電話を閉ざしたのちに、作者が視線を上げ、空を見て、そこに虹を見たのか、あるいは、暗くなった画面上に虹が映っているように見えたのか、それとも、ちょうど、目を閉ざせばそれまで見ていた光が網膜に残っていて、それがぼんやり見えるというような情景を詠んだ

小野短歌会

松尾　鹿次

代　表　藤原三代子
副代表　阿尾日出子
会　計　藤井　久子

事務局
〒675－1371
小野市黒川町五七三
松尾鹿次
☎（〇七九四）六二－二八四六

薫　風

発行人　平井　恭治
入会金・添削料　不要
月刊　会費月　1,200円
旧号　一　部　500円

発行所は神戸市。
創立後半世紀が過ぎました。
歌はこころ。自然を愛し、
人を愛する仲間たちの集まりです。

花鏡短歌会

石橋妙子

〒658-0072　神戸市東灘区岡本2-10-3
TEL (078)441-3740
FAX (078)441-3744

－運営委員－

安藤成子　落合民子　鬼塚利子　金田康子　黒部道子　富田弘　長岡裕子　中川一美　藤本匡代　増井定子　松田博子　松本八重子　三木雅子　三津野幸代　吉矢清子

海市短歌会

編集発行人　中川　昭

発行所
〒650－0027
神戸市中央区中町通三－一－十五
神戸コーポラス七〇一
☎（〇七八）三七一－〇二三九

神戸支部
〒653－0813
神戸市長田区宮川町
四－八－一－三一三
明石多美子　方

好　日

「編集委員会」発行

選　者
中野　照子　小西久二郎　神谷　佳子
古木さよ子　益永　典子　福岡　勢子
本土美紀江　西村　孝史　前川登代子
扇　龍子　渡辺　秀枝

連絡先
〒662－0072
西宮市豊楽町十二－十
益永　典子

発行所
〒651－0077 神戸市中央区日暮通4丁目1－7
（サニーコート日暮202号）
薫　風　社
TEL・FAX　(078)221-0023
振替　01160-2-6567 薫風社

編集部　長谷川　正
神戸支社　長岡治子　播磨支社　西山寿美栄
宝塚支部　新家絹子　丹波支部　上本このえ
尼崎支部　濱恵美子　三田支部　雑賀実枝子

ものなのか、様々な意見が交わされたが、作者がどのような情景を描いたのか、特定しがたかった。

それに対して、白組の歌は「春の馬」とは、雲のことであり、これは狐の嫁入りのような、つかの間の気象の変化を詠んだということが迷うことなく分かる歌である。雲の喩えを「春の馬」とするのに疑問の声も出されたが、何でもないような、さりげないことを詠みながらも、そこに詩情があふれている点が好意的に受け止められた。

また「みじかい・あい・だ・みち・を」という具合に「イ」音を「ミ」音で挟むことによってリズム感が整えられているという指摘もあった。

大辻氏もこの短歌で用いられている「ゆ」という言葉に注目し、これは「から」という意味の万葉語であるが、こういう言葉が、「みじかき」ではなくて「みじかい」という現代口語を思わせる言葉と一緒に配置されることになって、あたかも現代から時の彼方へ飛んでいかされるような感じがするとして高く評価した。もちろん、そのようにいえば、口語と文語のチャンポンはいかがという意見があがることも容易に予想されるが、大辻氏によれば、この作者は、そういった異論が上がることすら予期して、「みじかい」の「い」は、イ音便だともとれるように、つまり文語だと言い逃れができるように用意周到な準備を怠っていないのだ、とした。何とも憎らしいような巧みさといえようか。とはいうものの、結果は紅組の歌、白組の歌、双方甲乙付けがたく、持（引分け）とされた。

その次は「歌」の歌である。

（紅組）

上流層罵る歌がスウェーデン家具屋に薄く流れはじめる　田中幹

（白組）

不可能の「ふ」に僕はいてやまとうたは僕を殺すためだけにある　上條翔太

（判者）大辻氏　（読師）尾崎氏

紅組の歌、「上流層罵る歌」というのは、ロックだろうか。歌詞をつぶさに聞いたら、明らかにそうであるのに、その曲が流行のものだという理由からか、おそらくはそういった、いい加減な選ばれ方で、流されてしまっているのであろう。こともあろうに、まさに上流層の人びとが集う高級な「スウェーデン家具屋」で。彼ら、上流層の人びとはそれを聴いて何を感じるのだろうか。あてこすられたと感じるか。それとも何も感じないほど鈍感なのか。いずれにせよ皮肉な現実を詠んだ歌という解釈が成り立つ。

「薄く」と表現したところが巧みで、上流層への明らかな敵意となっていないところがよい。むしろささやかな、気付かれるか、気付かれないか、分からないところで行われた批判ではないか、という意見も出された。

その一方で「スウェーデン家具屋」といっても現代のイケアを思い描けば、必ずしも高級だと決めつけない方がよいのではないか、むしろ「スウェーデン家具屋」の「屋」という表現には、そこを蔑んだような調子があるという指摘もあり、そういうところで「上流層罵る歌」が流れるというのは、むしろ貧乏人のひがみ精神にすり寄るしたたかさを皮肉っているのではないかという意見も出された。

次に白組の歌。

紅組の歌も「スウェーデン家具屋」という言葉が、第三句から第四句を跨ぐ形で、歌としてのリズムをのったりと崩していたが、この歌でも第三句以降が「やまとうたは僕を殺すためだけにある」と、ひどい破調になっている。

しかしこの破調は方人たちには好意的に受け入れられた。このように敢えて破調にすることによって、和歌への嫌悪、ひるがえっては和歌に馴染まない自分自身への苛立ちが、うまくあらわれているということであった。

上句の「不可能の『ふ』」の「ふ」という言葉を選んだことに関しても、この、吹けば飛んで行ってしまうような、力が抜けてしまうような音によって、自分のこころのあり様をうまく表現していると好意的な意見が出された。

短歌に嫌悪感があるということは、逆にいうと、それだけ短歌に執着しているということであり、そのくらいの思いがなければ、歌人は成長していかないのではないか、むしろこのような嫌悪感を抱い

香寺短歌会

代表　金井とし子

会計　井奥　弥生

連絡先　姫路市香寺町香呂438
生田　よしえ
☎(079)232-4003

コスモス藍の会

小野はつね　小野　幸恵　久保　崇子
久米川孝子　黒田　富栄　菅原　艶子
田坂　恭子　田中　恭子　林野千代美
福井　弘子　本位田米美　水野　美子
三宅　幸子　山本　元子　弓岡あき子

〒671—0121
高砂市北浜町牛谷三八八
久米川　孝子

コスモス　桐の花

代表　尾上　田鶴子

雨内冨美子　井上　嘉子
尾上田鶴子　斉藤　郁代
新家加代子　増田　貞子
森澤　敦子

連絡先
〒671—2121
姫路市夢前町宮置一四四
尾上　田鶴子
☎(〇七九)三三五—〇四三三

ている作者の将来の羽ばたきを期待するというエールも送られた。

とはいうものの、短歌に関する短歌は、塚本邦雄の歌の中には多くあるとはいうものの、実際につくるには難しいものである。どうしても自分の世界の中だけで空回りしてしまっているような感じになりがちだからである。この歌もやはりそうなってしまっているのではないか、という意見が出された。

よってここでの大辻氏による判は、紅組の歌の勝とされた。

最後は「祭」の歌である。

（紅組）

来しかたのをんなの憾みぼんぼりをよぎるは雛祭のゆふべ　廣庭由利子

（白組）

ゐないゐないばあと生れきしこれの世の祭りは過ぎてあとの日日　田岡弘子

紅組の歌、人生の中で多くのことをやり残して来てしまった自分自身への憾みが「雛祭」と組み合わされて、呪術的に表現されているところに評価が集まる。うらみを通常の「恨み」という字を用いずに「憾み」と、余り見ることのない字を敢えて用いているところに、そのうらみの他人には分かり得ぬ深さが示されているという意見も出される。

作者の漢字表記への執着が、つまり短歌を音からだけでなく、ビジュアル的にも表現しようという思いが強く打ち出されているといえよう。また、「ぼんぼり」を出すことによって、歌一首の幻想性が高められ、さらに続ける助詞に「を」を選び、「ぼんぼりを」とし「ぼんぼりに」にしない点が、丁寧な言葉の選び方だと評価された。

講　師
山田氏

箸　刺
森嶋氏

総合司会
小林氏

この紅組の歌の「憾み」に対して、白組の歌は、悟りを開いたような涼やかさが表現されている点が注目された。人生のイベントを全て済ませてきてしまい、あとは余生を残すばかりといった達観した思いが感じられる。

しかし決して暗い歌ではなく、逆に明るく老いてしまった自分という者に向き合っているところがよいという意見も出た。

また下句「祭りは過ぎて」の「て」によって、一拍おいたあと「あとの日日」とつづけた形になっているのが、非常に巧みであるとの指摘もあった。

この点をふまえ、大辻氏は白組の歌を勝とした。

これにより、全ての歌合せが終了し、箸刺として記録係を務めている森嶋郁子氏から合計点数の発表があった。

紅組、一勝。白組、三勝。持、一回。よって今回の歌合せ全体の勝負は、合計して白組の勝とされた。

このように今回の歌合せでは、尾崎まゆみ氏が巧みに方人の意見を引き出していったため、方人間に年齢差があるわりには、お互いに遠慮し過ぎることなく、意見の交換が活発に行われたように思う。

また、そのような形で自由に、幾分ざっくばらんに意見を交換しつつも、ほどよい緊張感を常に保っていたのは、判者の大辻隆弘氏の存在の大きさによるものであろう。丁寧な語り口で、しかも説得力のある大辻氏の判であった。

観衆からの意見を聞く機会が、時間に追われる進行の都合により設けられなかったのは非常に残念であったが、聴きごたえのある、まさに、年齢を越えて楽しめるものとなったのではなかろうか。

今回の歌合せで、壇上のひとりひとりが、また観衆のひとりひとりがそれぞれ刺激を受けたことをもとに、今後さらに作歌に励んでいただくことを願うばかりである。

佐用短歌連盟

会長　安藤直彦

グループ代表

吉田照子　菅原艶子　新家イサ子　尾上節子　船引貴明

［連絡先］　0790(84)0150　新家 イサ子

流派を超えた短歌交流誌

楠田　立身　編集

象

(SHO)

入会歓迎

〒670-0843

姫路市城東町清水13-7-404

楠田方　☎(079)285-1695

短歌ぐるうぷ象の会

創刊　宮　柊二

コ　ス　モ　ス

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭1-2-17

姫路支部

支部代表　飯田　進

運営委員　尾上田鶴子　浜崎　泰子　矢内　温代　三宅　幸子

連絡先　〒671－2233　姫路市太市中678　飯田　進　☎(079)269-0513

コスモス　葛の花

会場　多可町八千代区　八千代プラザ　第二水曜日　午後１時

代表

〒677-0121　多可郡多可町八千代区　花の宮1171

岸本　しげ子

☎(0795)37-0680

2013年度 兵庫短歌賞

桂　保子（未来）

1950年生まれ、宝塚市在住
1991年「未来」入会
1995年「未来賞」受賞
歌集『青い封書』『夕庭の枇杷』『たんぽぽはちみつ』

白い小さなドア

・マグカップに黄のガーベラの明るけれさみしがり屋の風が触れゆく
・しろがねの鎖を揺らす風あれど誰かに漕がれてこそのブランコ
・ほんとうに逝ってしまった。シェーバーも靴も私も携えゆかず
・風に稜あり闇に縁あり持ち重りするかなしみはかたち見せねど
・喪の庭に椿つややか千ほどの手続き終えて空っぽわれは
・掌がふたつ踝ふたつ群肝の心にスペアが　あるはずないか
・時計の針をざざっと先に進めてはくれぬか時間の神わが在らぬ日に
・共に選びしワイングラスに月光を充たす遊びす眠れぬ夜を
・乱雑に本を積みおく暗がりゆ低き声せりもうおやすみと
・身の洞に陰画を預かる工房のありて星夜をたれか働く
・灯を消さず眠る夜ありフィボナッチ数列三つ四つ呼び出しつつ
・もうすぐに止むよ止むよと言い訳をしつつ降る雨、私だろうか
・ときじくのかくのこのみの花匂うごとき幸い振り向けば輝る
・ドコモショップの賑わう椅子に思ってみる彼岸にメールを打つ術あると
・『こびとづかん』を忘れてゆきし幼児が寝息の頃かginをグラスに
・千五百秋過ぎた気がする大窓を磨き椅子よりわが身下ろせば
・白い小さなドア思わせ朝空にうかぶ半月　開くかもしれぬ
・亡き人が挟みし栞のページより読みゆく「牛はなぜ北を向く」
・しらまゆみ春のあわゆき天空の言葉告ぐるか箔帯びて降る
・丘の上に夕日の欠片きらきらと影踏み遊びをしないか風よ

2013年度 兵庫短歌賞

青田綾子（文学圏）

1940年生まれ、神埼郡市川町在住
短歌歴　25年
「文学圏」編集責任者
歌集『声凛と』

限界集落

・鳶の輪の中におさまる村ひとつ軒を寄せ合う秋日に照りて
・草畦の紺の野良着に翅やすめ秋の蝶々呼吸ひそけし
・大時計とき刻みおり遊ばせる子らとおになき村の広場に
・満月に刈田の匂う野の道に尾のある影とすれ違いたり
・日だまりの秋の野げしに舞う蝶は花の高さを越ゆることなし
・塀ぎわに嫗ふたりの立ち話秘密保護法憂えて終わる
・花枇杷に虻を遊ばせ午後の日は林の上にとろみてゆけり
・まるまりて豆選る嫗冬の日に温められて背より溶けゆく
・ひと息に落葉とげて大銀杏冷ゆる月下に影を正せり
・雪空に風呂の煙をのぼらせる嫗ひとりの茅ぶきの家
・濁り声ひとつ落として夕闇の深まる空へ消えてゆきたり
・薪もて自らたてし初湯にて嫗逝きたりオリオンの下
・雪次第に降りつのる夕暮れとなり空低く飛ぶ鴉は鳴かず
・孤老六人戦没碑七基ふかぶかと抱きて雪に埋もるる村
・常会の隅に小さき話し声大正生まれの治安維持法
・丹精の畑の白菜大根が茎立ちてゆく老いいまさねば
・子ども会青年団もなき村に芽起こしの風　屋根めくるほど
・雪解けの峠を越えて行商のくだもの売り来　演歌流して
・大岩にわられて再びあう水がしぶきに青き虹をうみたり
・ゆるやかに湧きくる霧を木々の葉は雫となせり水源の森

2013年度 新人賞

種田淑子

1954年生まれ、明石市在住
短歌教室にて十か月
趣味（川柳・落語台本・バドミントン）

青い錠剤

・微かなるカルキの匂い漂わせ私の白は漂白の白
・空っぽの財布最後の贅沢はシャンパン色の絹の靴下
・狩人は女なのです赤い月昇れば今宵狩のはじまり
・メデューサの首を見たのかキプロスに男が化した石の群立つ
・潮満ちて満ちて女は戻らない赤い抜け殻だけを残して
・四面の鏡に包囲されながら自我の小部屋に書き割りの窓
・何を視て何から眼外したか麒麟おまえの瞳は静か
・忘れたき悲しきことがありし夜のメニューは茗荷ミョウガにみょうが
・絹糸の雨降り続く六月の繭に包まれ眠りつく午后
・一粒の青き錠剤手の平の処方箋には「海になれます。」
・月と星底に沈めて眠りおり夜のプールは空のミニチュア
・あなたの不在詰め込んであるがら

2013年度兵庫短歌賞等点数表
（評価順位を点数に換算）

作品名＼選者名	安藤	尾崎	小畑	黒崎	小谷	小林	田岡	中川	合計	順位
飛べない猫		10	5				2	7	24	6
青い錠剤			7		10	7		3	27	4
透明水彩bathroom	6	6		4		8			24	6
闇に消えゆく眠り姫たち	5	8	2	7	6				28	3
いびつな真珠			9				6	4	19	9
青いガラスのかけら		3	10	6					19	9
雪暗れ				2	5	2	10	8	27	4
限界集落	9		8	10	7		8		42	2
ルソーの森をゆく			4	5		3	9		23	8
白い小さなドア	10	4	6	9			5	9	43	1

選考委員
安藤直彦・尾崎まゆみ・小畑庸子・黒崎由起子
小谷博泰・小林幹也・田岡弘子・中川　昭
事務担当
落合民子・矢内温代・吉野節子
（50音順）

兵庫短歌賞全応募者（到着順・敬称略）
（公募の部・ノミネートの部）
岡本絹江、図子利明、嶋澤隆、矢野義信、斉藤和子、山田恵子、山口泰仙、武内栄子、奥田光子、岡田恭代、星野泰山、杉本玲子、岸本万由美、生田律子、種田淑子、上月しげ子、伊藤芳津、石飛俊郎、岡本光代、臼井てる子、福山裕恵、矢野未代子、山田麦、西村徹、塩見俊郎、清水昭男、宮城十子、大塚公夫、上條翔太、渡邊大貴、武富純一、廣庭由利子、吉永明代、南輝子、遠藤瑛子、西塚洋子、矢野一代、掃部伊津子、老月良一、尾花栄子、青田綾子、池本登代子、小林まや、伊藤絹子、太田富美恵、桂保子、桂日呂志、新家イサ子、矢内温代（49名）
今回の応募には上記49名の作品を戴きました。いずれも力作でありましたが、今号に作品を掲載することができませんでした。次号にてその作品抄及び一部の選評など掲載の予定です。ご期待ください。

受贈歌誌・会報等
印南野文華、海市、薫風、幻桃、コスモス姫路、梧葉、五月風、佐用文化、白珠、すずかけ、青天、象、但馬人の歌、丹生、但丹歌人、ちぬの海、茅花、津布良、鳶が城便り、とべら、鳥、白圭、波濤神戸、花鏡、鱧と水仙、薔薇、飛聲、ひめぢ水甕、文学圏、ポトナム姫路、美加志保、夢、旅笛、林間、玲瓏、礫、六甲、尼崎歌人クラブ会報、石川県歌人、大分県歌人クラブ会報、京都歌人協会報、短歌堺会報、新潟県歌人クラブ会報、西宮歌人協会会報、日本歌人クラブ会誌「風」、大和歌人

・んどう音も立てずに闇が身じろぐ
・ヘブンという店に置かれている秤（はかり）どうぞ心を載（の）せてください
・プライドの芯を一本真ん中に君はいつでもアルデンテだね
・その湯屋に入ると生まれ代われます今再びの産湯はいかが
・真っ白なお皿に乗っている奇跡しんしんとイブ氷点下2度
・ツンツンと裸木（はだかぎ）天を突き刺して無神論者のシュプレヒコール
・踊りの輪だんだん小さくなって冬気づけば一人木枯らしが哭（な）く
・寝足らぬと愚図つく春を宥（なだ）め終え風を招いた朝の食卓
・幻の白いウサギを追いかけて明日へと「続く」Myカリカチュア

2013年度 奨励賞

西塚洋子（象の会）

1949年生まれ、神戸市垂水区在住
2002年神戸新聞文芸年間賞
「象の会」所属

雪暗れ

・秋晴れの日がつづく時なにもかも上手くゆかなくなる日が怖い
・芒原展望台に登りきて遥か遠くに山並みが見ゆ
・お互ひに他人のやうな顔をして離れ離れの席を選びぬ
・都会には都会のくらし寒雀入つてゆけぬ地下街のあり
・いつの間にできたのだらう指先の小さな傷に寒の雨降る
・冬の田のはぐれ鴉が一点をぢつと見てをり首を傾げて
・しつかりと目を見て話す幼子のてのひら少し大きくなりぬ
・霜柱のこる裏庭背を丸め足音のなき猫の歩めり
・夕暮るる改札口に人を待つ片手に重き男傘持ち
・門灯をつけておかねばあの人は私のところに帰つてこない
・いま少し夢を見たくて初夢に赤い指輪をして眠りゆく
・音程は狂ふし歌詞は忘れるしプリマ・ドンナになれるはずなし
・離陸する機体の席に逃げ込んだ小鳥みたいに小さくなつて
・飛行機の窓の外からとんとんとピーターパンが来ればいいのに
・知らないが知つてるふりをしてみたり知つてはゐるが知らぬふりする
・身体からひとつひとつと締め付ける物を取り去りわたしに戻る
・雪暗れとなりたる空の片隅を風に吹かれて飛ぶ鳶一羽
・湖（うみ）近き盆梅展のしづけさに雪降る音の聞こえてきさう
・閃きのやうに冬菊咲いてゐる城なき城の石垣の間に
・子が鳩を追ひかけ遊ぶ駅前のベンチに杏（あん）と過ぎゆく時間

選考経過報告

中川　昭

平成二十五年度「兵庫短歌賞」選考委員会は四月五日午後一時から五時まで、神戸市勤労会館において、選考委員八名全員の出席を得て開かれた。

選考方法は各委員が一位に推す作品に十点、二位に九点、三位に八点、以下十位に一点を与えるという形で、総合得点の高い順からの批評を第一次審議とした。

その結果、総得点四三点の「白い小さなドア」（未来・桂保子氏）が一位、四二点の「限界集落」（文学圏・青田綾子氏）が二位となり、議論百出の審議の中で、喪失の哀しみをしなやかに歌い上げた感性と表現力（「白い小さな―」）、また今日的社会問題に取り組んでテーマ性や作品構成に卓越した力を見せた（「限界―」）二篇を「兵庫短歌賞」同時受賞に決定した。

また、ひとりの女性のレーゾン・デートルを静かな抑制の中で心象的に捉えて余情にあふれた、総得点二七点四位の「雪暗れ」（象・西塚洋子氏）は捨て難い作品として評価も高く、二次審議において「兵庫短歌賞」と揉み合う展開も見せたがわずかに及ばず「奨励賞」で決着した。

「新人賞」は総得点二八点三位の「闇に消えゆく眠り姫たち」（無所属・渡邊大貴氏）と二七点四位の「青い錠剤」（無所属・種田淑子氏）が雁行し、一点差ながら「闇に―」を一位に推した委員がいなかったこと、作品にやや粗さが目立つこと、将来の可能性に期待できることなどの評価から、今回は次席とし「青い錠剤」に「新人賞」を贈ることに決した。「雪暗れ」同様、四位が三位を逆転したことになる。

「青い錠剤」はギリシャ神話を基底に置きながら、現代人の持つ漠たる不安や焦燥感を独自な感覚で表現していてその言葉の切り込みは匕首のように鋭い。ただし、言葉が先行し、詩型に落着性の薄いのは今後の課題だろう。

また、選考委員が一位に推す作品ながら総得点（選考委員の総合評価）が低く、惜しくも受賞を逸したものとして「飛べない猫」（千鳥・山田恵子氏）、「青いガラスのかけら」（無所属・遠藤瑛子氏）があった。選考委員一名のみの得点十点を得た「九十九年」（六甲・生田律子氏）も佳品である。

そのほか、第三次審議においても議論百出した作品として「透明水彩」（無所属・山田麦氏）、「いびつな真珠」（水甕・吉永明代氏）、「ルソーの森をゆく」（花鏡・池本登代子氏）、「飛騨逍遥」（未来・廣庭由利子氏）、「ゴドー、ゆるやかに」（無所属・上條翔太氏）などがあげられよう。

総評を言えば、今回の受賞作は、それぞれ拮抗しつつも安定性があり、委員一同熱く長く議論したわりにはすんなりと決まった。妥協し合ったということではなく、受賞を納得させうるほどの力が、既に作品そのものに備わっていたということだろう。もとより満場一致の決定である。

今回の公募作品は二八篇、ノミネート二一篇、合計四九篇、昨年を上回った。また、応募者の最高齢は九十歳、最年少は二十二歳（二名）、三十代が二名。五十代が四名。六十～八十代が圧倒的に多かったことを付記しておく。

2013年度第3回幹事会報告

3月29日（土）、神戸市勤労会館にて開催。出席幹事23名、委任状7名。高井忠明氏の司会のもと、安藤代表の挨拶に続き、議長に三津野幸代氏を選出。

◇**2013年度事業報告**（今年度新たに設けられたもの）

- 『年刊歌集』の活用として秀歌を選び会報に掲載する。（会報4面増やす）
- 「兵庫短歌賞」（兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞）を設ける。
- 会費を「1000円以上」と表現する。
- 会員の出版歌集等の批評、勉強会の開催。（12月14日、矢内温代歌集『しろがね世界』　來田康男歌集『法螺吹きの末裔』をとり上げた）

◇池本登代子氏より**会計報告**。　◇小畑庸子氏より**会計監査報告**。承認。

◇**2014年度事業計画**（新たに設けられるもの）

- 兵庫県歌人クラブ主催の歌集批評、勉強会。（6月・9月・12月予定）
- 7月16日（水）ＮＨＫ学園「神戸市短歌大会」に協力。
- 11月22日（土）兵庫短歌祭は加古川市にて開催。

◇会員の増員、短歌祭等の参加人数の増加を図り、「秀歌」を発掘、共有、顕彰し、地域、世代の隔てを越えての、当歌人クラブの存在意義を高める事を基本方針とする。

新年会の記

恒例の歌人クラブ新年懇親会が、1月12日神戸東急インにて開催された。兼貞靖行幹事の司会のもと、安藤代表の挨拶に続き、昨年各賞受賞の浮田、三津野、黒崎各氏に花束が贈呈された。各氏からは、更なる貢献と作歌への意欲等前向きな挨拶があった。来る4月29日の神戸短歌祭の歌合せ参加予定者など新たなメンバーとともにクラブに貢献されてこられた先輩方との交流もあり、全員の意欲的かつ新鮮な自己紹介が続いた。最後に質問に応え、安藤代表の兵庫短歌賞への抱負と厳正な選考を行う旨の挨拶で締めくくられた。出席者33名。

平成二十五年度

兵庫のうた　秀歌抄　『年刊歌集』第53集より

はじめに

安藤　直彦

兵庫県歌人クラブの存在意義として一つ思うことは、歌作りを人生に選んだもの皆にとってのその「よい環境」作りに資することだということ、その一つに、年次発刊の『年刊歌集』を活かし、「よい歌」を共有し、「秀歌」を顕彰するということを願った。「よい歌」については種々の見解もあろうが、結社、流儀、有名無名をこえて、いいものをいいとする場であることを思った。個々の作品は「いい読者」を得ることによってより達成されるという。ここに積年の短歌眼をお持ちの方々に選歌、選評をいただいた。願わくはこの企画が、それぞれの生を強め、歌作りのよろこびに繋がりますことを。

兵庫短歌賞選者が選んだ「わが注目した歌一首」（あいうえお順）

安藤　直彦選

茶の澁の染みし罅もつありし日の白磁に淹れて打つあさの鉦　野瀬　昭二

五つの動詞、その動きの一つ一つに切にじんわりとした亡き人への思いがこもってい、それが冗漫にならず、一種、絶対境のあらわれた挽歌とみる。

尾崎　まゆみ選

飛ぶ鳥に食われて遠くに散る種子ら再会などの約束はせぬ　竹村　公作

実が食べられて種子が運ばれる自然の営みに「再会」という心情をからめて非情をあぶり出す。

小畑　庸子選

石段を数えつつ上る百段になれば再び一から数えて　神保原廣己

登った百段を過去とし、新しい一段を未来へと登ろうとする作者が見える。

黒崎　由起子選

大楠に走り寄りたる園児らの影法師みな盗まれにけり　たなかみち

年老いて魔を抱える大楠、あの子たちは帰って来たのだろうか。

小谷　博泰選

迷ひなく蜘蛛は一糸を引き始む夕光の中燃ゆるひとすぢ　上條とみ子

あざやかな印象が残った。生の営みの中での、最も美を感じさせた一瞬。たとえ残酷な夜が待つとも。

小林　幹也選

下駄箱に朱の靴はあり八日間のインドの埃つみたるままに　青田　綾子

すぐには思い出したくないほどの密度の旅愁をさりげなく表現している。

田岡　弘子選

老熟はあれど老衰なしといふ書を読む窓に沈丁匂ふ　香下　艶子

生の集大成として老いの有り様を静かに問い深く考えさせる一首。

中川　昭選

コンクラーベの白い煙が湧いて出るけむりの出ない火葬場にいて　井上恵津子

諦め難い死者への心情が切実に深く四句に凝縮。対句的手法も卓抜。

バイアス的思考回路で捉えた佳品　土居　正

水の音戸を開ける音皿の音私のためにだけする朝の音　岩田美代子

わたくしの思考のようだバス停に片方だけの手袋がある　栗村　涼子

捕まえたと我は思っているけれど「捕まってみた」この犬の眼は　武富　純一

若嫁のサブリナパンツを握り締めストラップのやうなるをさなが揺るる　たなかみち

ひとともにふたたびみたび咲く花のトゲを集めたやうな薔薇の字　西田　弘子

雪隠の燈の消し忘れの揶揄なども互みの晨（あさ）のたのしみなりき　野瀬　昭二

自然薯の髭を焙れば咲く火の粉産土神の目覚むるやうな　廣庭由利子

朝日さす路上に光る捻子のあり地球に何を留めてゐたのか　牧野　秀子

日日生きて日日死にてゆくデジタルの時計いくつに囲まれながら　益永　典子

見ゆるとはありがたきかなあの人の裏切りまでも見えてしまいき　矢野　一代

かつて故小津安二郎映画監督は「映画つくりはその映画の後味が問題なのである」という意味のことをいったが、短歌も正にその後味の感触如何によって評価が分かれよう。したがって私は今日の物質的豊かさの中で言葉の疲弊を感じながらも日常茶飯事的に生起する何でもない事象に対して、作者のアイデンティティーを活かした感性と表現の歌にシンパシーを覚える。そしてそこに有心の抒情詩として、時代への微細な批評を漂わせ、少なくとも私に新鮮な後味を味合わせてくれた作品を推すことにした。譬えば岩田さん、野瀬さん、益永さんの歌にみる、裏付けのあるポジティブな現代の孤独感。栗村さん、たなかさん、西田さんの意思的で時代に呼応する感覚の鋭い歌。廣庭さん、牧野さんの意表を突く点から面へのフェードイン的な広がりのある歌。また、武富さん、矢野さんのように生き難い現代を思弁的逆説発想で内心を披歴した歌等々である。

「わがよしとする歌」十首選

楠田　立身

汗の匂いさせて乗り込む高校生乾ききらない夏が光りて　遠藤　瑛子
うす霜に籬の花や触るる手に音なく落つる赤き幾ひら　蔭山美代子
境内の慰霊碑に沿いひっそりと軍馬、軍犬、軍鳩碑立つ　田中　弘司
〈磨き坂〉よき名のつきし登校路子はしほたれて下りし日あらむ　田渕　和子
サイフォンを一気に噴きあがる流れ見ゆ一月十七日あさの茶房に　中條　節男
置かれたるごとくに落ちて紅つばき遠き日の嘘うつくしくする　西田　弘子
朴の花咲いてゐたのか確かめに行きたる夫の待てど帰らず　長谷川育枝
生ゴミの袋に透けて見えている亡き夫宛のダイレクトメール　松田　貞枝
生涯を自分の力で動きたい念じつつ歩く思い弾ませ　安田　重子
野良仕事終りにしよう夫の声日暮れの水辺ゆらす鍬かげ　米子香珠子

短歌に内包する定型の力とリズム、大和言葉の持つ美しい響き、殊更の技巧を抑え、過飾の言葉を避け、平易で重層な作品をと、自らにも他人の作品にも求めている小生は、所属の記入のない作者の作品から選んだ。所属の記入が無いことは結社やグループに属していないか、属していながら記入を失念したかのどちらかだろう。前者を想定して思うことは、結社が解散したり指導者が死亡したなどの事情があるのだろう。何れにせよ指導を受けず独学で精進している方たちであると思うが、選んだ作品は前記筆者の望むところを満たしてくれる十首であった。

高齢化時代を生きながら最後まで自力で動きたい切なる願いを詠んだ安田さん、逆に将来を託すべき若者の姿を活写した遠藤さん。蔭山（佐用）さん、田渕（一宮）さん、西田（豊岡）さんはそれぞれ都会の喧騒から離れた居住地の実景に心象を重ねて美しい。田中さんは何処の慰霊碑を見たのだろう。なるほど戦争で戦ったのは兵隊だけでは無かったのだ。お国のためという大義のため馬も犬も鳩も戦死したのだ。中條さんの居住地は明石、一・一七が三・一一に重なりサイフォンの中の琥珀色は、かのどす黒い生き物のような津波に見えたのかもしれない。男性の右記二首は忘却すべからざる素材。ともに夫君に先立たれた長谷川さん、松田さんの歌はドラマのような悼みが読む者に直截に届く挽歌だ。

実り多い作品集を残すことができたことを共に喜びたい。

私の選んだ十首

自然　藤井　幸子選

冬空に円形の跡のこしつつ鳶はつかの間ひかりに消ゆる　生田よしえ
浮巣ゆれ漂ふごとし照り翳る五つの湖のま昼のしじま　石橋　妙子
広びろと土より吹けるつむじ風あけぼの杉の落葉まきあぐ　浮田　伸子
一月の張りつめてゐる冬空にひとつの花の開くまぶしさ　尾崎まゆみ
街路樹は剪定されて街はづれ斜光うするる冬田へ続く　尾上田鶴子
ベランダにかねたたき来てかねを叩く命急かるるようなさびしさ　小谷　博泰
五千匹蜜蜂一気に放たるるビニールハウスの苺の花へ　小松カヅ子
発つ鳥の脚より雫の気配なく水面は静かに見送る鏡　土居　正
ものごころつくやうに芽をだす桐の木の葉のかたち二つ開きて　西海　隆子
くらやみに山藤ふかく匂ひゐてなにがな思ふ光源氏を　藤岡　成子

生活　松尾　鹿次選

中学校の校長先生になつたよと童女のごとき母に告げたり　尼子　勝義
鍵穴に鍵をさし込みつまりまたここに帰って来たのかぼくは　上田　一成
ああ今年も無事に植付けを終へし夜夫に告げたり勤行の刻　浦元さよ子
俯きて地下足袋叩けばパラパラと湿りし土が土間を汚せり　遠藤とし子
癌を病む三児の母の吾が娘赤き毛糸の帽子が似合ふ　桂　日呂志
予期せざる恩赦のごとしいたつきの癒えて退院する日のこころ　楠田　立身
理不尽な介護度認定制度なり老いの言ひ分などみみずのたはごと　久米川孝子
こなしゆく田植えの準備によくもまあ心臓ことこと働きくるる　上月しげ子
背を拭い湿布貼りやるとき妻は祷りのごとく額を垂れおり　土居　正
茶の澁の染みし罅もつありし日の白磁に淹れて打つあさの鉦　野瀬　昭二

生老病死　尾上田鶴子選

東の空に初日の上がりたるああ七十年も生きてきたんだ　足立　勝歳
家を捨て福島を棄て東の間の息ととのえる後ろめたさよ　高山紀代子
爽やかに正しくものを見極めむ眼鏡の曇り念入りに拭く　本位田米美
認知症となりたる母は昇任を伝ふる吾に拍手くれたり　尼子　勝義
誰見ても吠えぬ隣家の老犬が突如大きく嘘をしたり　岸本しげ子
偶々のテレビに映る我が姿老いさらぼふを隠すとはせず　松尾　鹿次

「おまえにはおまえのような娘はいない」看護されつつ案じいる父　細目　早苗
死の覚悟決めたる娘ゆつくりとホスピス棟へ移りゆきたり　桂　日呂志
ふたたびは母をうつさぬ母の鏡が窓の向かうのあぢさゐ映す　牧野　秀子
日々落つる椿をひろふ作務の朝ほつり紅ほつり真白く　大塚　靈雲

社会　荒浜　悦子選

今もなお行方わからぬ人びとの鬼哭啾啾海の底より　上田　一成
少年兵これぞ大義としたためて母に詫びつつその朝離陸す　牛島　進
シベリヤで飢えと寒さに散りし兄夜毎の夢にむさぼりて食む　岡村起美子
無造作に置かれてありき「勝つため」にとみ寺より来し釣鐘数個　梶原　温子
桜ののち花水木散り牡丹散り迷走日本の夏は来にけり　楠田　立身
強欲の限りあらねば原子炉に明かりともして笑いあいたり　小谷　博泰
境内の慰霊碑に沿いひっそりと軍馬、軍犬、軍鳩碑立つ　田中　弘司
原発の始末はだれがするならむ開けしままなるパンドラの匣　澤田　尚夫
低金利税の引き上げ老人に其の上何をせよと言ふのか　松尾　鹿次
先の戦争いく千万の死を煽りいま原発の危機載せぬ新聞　三木原千佳

動物・植物　足立　勝歳選

黎明の烏を呑みし黒き雲ほそきひかりの刃に開かるる　生田よしえ
街路樹にねぐら求めて群鳥が鳴きさわぎつつ茜をつつく　上田　一成
辻ごとに詮索好きな猫がいて誰と会うのかまた聞いてくる　黒崎由起子
砂にいるシオマネキたち千年も万年もかく汐まねきおれ　小谷　博泰
さみどりの糸のやうなるかまきりが朝顔の蔓に乗りて揺れをり　藤井　貞子
一面にササユリ咲けばしずまりてすべての耳に夕暮れがくる　岩尾　淳子
三月の紅かへるでの幹も枝も内より燃ゆる　雨の街路に　小畑　庸子
野すみれの一輪咲くを見つけたる例へばそんなよろこびのあれ　田岡　弘子
大楠に走り寄りたる園児らの影法師みな盗まれにけり　たなかみち
六道のいづれの獄に沈むとも今日は菩提樹の花につつしむ　中川　昭

愛・恋　上田　一成選

心まで射られているよう月光にあなたの瞳まっすぐにある　井上恵津子
木蓮の白きを手折り汝が胸にさして華甲の恋をうち明く　大塚　靈雲
惜しいなぁ君がてのひらサイズならぎゅっと潰して飲んでやるのに　上條　翔太
渡す筈のチョコレートの包み置きしまま日々感触の薄れゆくなり　上根美也子
帰るため出てきたやうな街に買ふ抱茗荷文様男物茶碗　たなかみち
消せばなほ寝らへずのこす小さき燈に真夜を顕ちくるたづさへ合ひて　野瀬　昭二
つつましきパール一粒のペンダント恋も挫折も知りてひそやか　松岡　洋子
花の下宴に酔いしいちにんを顕たせて青き草原は朝　丸山　愛子
霧晴れて紀州の山に会へる日は海越えて白い封筒がくる　三好美奈子
たまねぎを原形なきまで切り刻み戻れぬ戻らぬ決意固める　矢野　一代

仕事　尼子　勝義選

腎炎の進行阻止に全力をと教授の指示に心を決す　有本　保文
自販機の前に立ち尽くす我なれど社食のメニューは即座に決める　老月　良一
水田はダイヤモンドといふ記事を胸にたたんで田植足袋はく　上月しげ子
出世から外れし我等をこの組織に残すか値踏みをしてゐるのだろう　來田　康男
我が手帳埋め尽くされて安堵する悲しき性なり団塊世代は　清水　誠朗
職退きてはやくも三年診る技を忘れてならずとわが脈に触る　中條　節男
トラックのわずかな影にへばりつき工事の男ら弁当を食む　永山　洋子
職員室向かひのデスクにとまる蝶小さき羽の黄金の存在感　宮城　十子
毎日を一人元気で店をする灘中央市場で五十年になる　宮本ハツミ
年下の後輩を専務と記しいる紳士録名簿本屋に立ち読む　矢野　義信

旅　足立　晶子選

北ぞらの雪すだれ指し高速道を零下一度の風うけて駈る　浮田　伸子
秋のつばめ午後海原を渡りゆく黒き尾羽の裂れを深めて　小畑　庸子
あの雲に乗れるだらうか　枯れ草と一緒にもやす旅のレシート　掃部伊津子
峠路のつめたき湧水に人並び六月熱き山里となる　岸本万由美
晩秋の能勢電に乗る夜香木の遅き蕾の枝を携え　佐々木春美
日影とふバス停の文字見つつ過ぐいつの世誰が名付けしならむ　澤田　尚夫
尾根また尾根うろこのように重なりて海まで続く島の入江に　塩澤　文子
野良猫の水飲んで去る無人駅杏の花の咲き始めたり　鈴木　紀子
秋陽降る野辺の道ゆく路線バス津和野から萩へ乗客三人　松岡　洋子
渓あひのロッジは暮れゆくときながく峯をまはりて霧もどりくる　三好美奈子

歌の深化を希う

中川　昭

人はさまざまな境涯の中に生きている。親や兄妹、夫や妻への弔歌、病気平癒を願う人称代名詞の歌が多く目立つぶん、作者たちもまた生き難く生きている証なのかもしれない。

眠剤にゆだねし夜の夢に来ておいでおいでをしてゐる死者ら　楠田立身
いつからを余生というや幾たびも色を変えゆく紫陽花の八重　土居　正
茶の澁の染みし罅もつありし日の白磁に淹れて打つあさの鉦　野瀬昭二
添ふといふ言葉やさしも添ふことのなかりし時は皆健やかなり　山中洋子

生老病死の哲理に慨嘆沈潜するこれらの歌群を本集第一の特長とすれば、詩性あふれて未来が展がる次の歌群を第二の特長と言っていいだろう。

咲き満てる桜のやうにはちきれさうな胸なんです手をあててください　安藤三從
夏の日は夏の形でくらしをりひまはりの咲くふたりの家に　西塚洋子
置かれたるごとくに落ちて紅つばき遠き日の嘘うつくしくする　西田弘子
絹のやうな春の陽射しをわが冬の硝子に呼びて目ざめゆくなり　三好美奈子

完成度の高い作品がある一方で、雑報歌も少しく覗く。歌の深化を競う年刊歌集でもありたいと希う。

「第1回批評会」記

小林　幹也

「第1回批評会」は、平成25年12月14日（土）に勤労会館404号室にて行われた。兵庫県歌人クラブの新たな試みである。今回は矢内温代歌集『しろがね世界』と來田康男歌集『法螺吹きの末裔』が取り上げられ、それぞれのレポーターは尾崎まゆみ氏に、飯田進氏。司会は私がつとめた。

矢内歌集には、夫の死、そののちに続くひとりきりになったくらしが印象的に描かれている。しかし尾崎氏はそれ以外にも歌の出来栄えの豊かなものがあるとし、次のような空を描いた歌に注目、その面白さについて語った。

・庭先の青きバケツにいわし雲映せる秋の水澄みてあり
・幼らが「空あり」と読む駐車場　真上に青き空の広がる

一方、來田歌集は、職場への不満や上司への苛立ちを露悪的に吐き捨てた作品が目立つ歌集である。しかし飯田氏はそういった題材面からではなく、表現の工夫という観点から來田作品へアプローチし、次の歌をあげた。

・鰻手に掴むとにゆるり又掴むとにゆるり掴めどにゆるりにゆるり
・白菜の芯ぐされ病は名の如く芯の芯まで腐り果てたり

両歌集について会場からの発言も活発で、意義の多い会となった。第2回を待望する声が既に寄せられている。

受贈歌集・歌書

☆『雀舌記』　井上生二　本阿弥書房

舌の癌切られすぎゆく日のあした雀を聞けり舌切りすずめ

☆合同歌集『奥播磨11』
☆『年刊歌集第36集』　西宮歌人協会

国富ますためには草も木も民も視野に入れずき施政というは　井上美地

☆『毬子』　延原佐知子　短歌研究社

夕闇を掬えば小さき音のして夢のひとつのこぼるる音や

☆年刊歌集『給水塔第三十九輯』　東浦短歌会

撒きし豆拾う者なし我が後に掃除機構えて愚痴る鬼居る　来田　務

☆合同歌集『石蕗』　香寺短歌会

東まはりの道を歩みて夕ぐれの狐塚にてをつとに遇へり　生田よしえ

☆『乱れ草』　藤本　啓　私家版

天高く我が物顔に歌いながらこっそりと帰る草原の中

☆『どるふぃん』　合同歌集第12号　尾崎まゆみ　砂子屋書房

☆『奇麗な指』

奇麗な指はリアルではない傷口をビニール傘のやうにくるまれ

☆俳句短歌歌集『佐用文化第149』　小畑庸子

☆『白い炎』　角川学芸出版

己が背を崖より剥がし歩み出す新月の夜の石の仏は

☆『蝸牛も過客』　藤本則子　角川学芸出版

夜の更けの出窓に秤のしろがねの針はすずしくOを指しゐる

☆『葡萄むらさき』　滝下恵子　ながらみ書房

さびしさのきはみは秋の晴天の昏昏と日はふりそそぐなり

☆『月代の山』　佐中ますみ　北羊館

月代の山にむかいて合わす掌のほのぬくもりを愛しとおもう

☆歌書『狂歌逍遥第2巻　近世上方狂歌叢書を読む』　吉岡生夫　ブイツーソリューション

☆印南野だより　松田和薫

万葉の地印南野よりの発信。

☆『黒耶悉茗』　廣庭由利子　ながらみ書房

ゆふべよりややふくらみし半月を忝のころぐさでこそぐりませう

☆『メロンパン』　大崎瀬都　ながらみ書房

メロンパンのなかはふはふは樫の木に凭れて遠き海を見ながら

☆合同歌集『猪名川』14号　足立晶子短歌教室

いまひとつ頷けないと思いつつ吊革に揺れる夕べなりけり　朝倉恵子

☆『縷の煌めき』　吉村彰子　砂子屋書房

縷の縷の煌めきを小枝より空と懸ける春のさきがけ

地区通信

【阪神】 2月2日、園田学園女子大学にて第11回契沖顕彰短歌大会開催。選歌と選評は安藤直彦、田岡弘子、たなかみち、中野昭子、伊藤佐重子各氏他4氏。契沖大賞秀清子氏。受賞作の総評安田純生氏。参加者400名。（たなかみち）

【神戸】 9月30日、植木清理歌集『ある日』上梓。▼11月19日、浮田伸子氏平成25年度ともしびの賞受賞。▼12月1日、『2012こうべ芸文アンソロジー』（神戸芸術文化会議）刊行。浮田伸子、中川昭、増井定子各氏ら6名が参加。▼4月4日、生田神社において曲水の宴が開催され、井戸敏三県知事、吉岡生夫、安藤直彦、中川昭、尾崎まゆみ、仁伍若菜、岩尾淳子各氏が参宴。御題「風」。▼4月10～15日、さんちかホールにおいて「神戸の百人色紙展」開催。尾崎まゆみ、中川昭、西海隆子、黒崎由起子各氏が出品。（黒崎由起子）

【明石】 11月23日、明石市生涯学習センターにて第40回明石市文芸祭表彰式を開催。短歌一般部門の応募総数333首。選者楠田立身氏。市長賞松田貞枝氏。ジュニア部門の応募総数818首。選者田岡弘子氏。市長賞山本美結さん。式後にそれぞれ選者の講評が行われた。▼1月1日、明石ペンクラブ（代表野瀬昭二氏）会報第131号発行。前代表谷村禮三郎氏の逝去を悼み、野瀬昭二氏が随筆「啓示の出会い」を発表。（伊藤敦子）

【姫路】 2月2日、第11回契沖顕彰短歌大会において赤藤緑氏（コスモス）が契沖賞を受賞。▼3月16日、姫路市民会館にて高野公彦氏を迎えコスモス姫路歌会開催。▼5月8日、上郡町生涯学習支援センターにて千種川学園開講式に上田一成氏出席。（上田一成）

【東播】 12月9日、加古川市中学校の「短歌に親しみことばの力を育てよう」との教育理念に賛同し、加古川市神吉中学校1年の短歌指導に、茅花短歌会と前田昭子、田岡弘子、石原智秋各氏出席。▼12月10日、加古川市加古川中学校2年の短歌指導に、安藤直彦、兼貞靖行、生田よしえ、松田辰子、浮田伸子、藤岡成子、森嶋郁子、前田昭子各氏出席。▼12月11日、加古川市別府中学校の短歌指導に前田昭子氏出席。▼3月1日、加古川市中学校国語研究部会は、短歌作品と前田昭子氏による選歌と選評、生徒たちの感想文を編集した『感じて短歌Ⅱ』を発刊。▼3月9日、茅花短歌会は稲美町国安天満神社にて恒例の第37回菅原道真公奉賛献詠祭を開催。一般の部出詠146首。小中学生の部出詠411首。選者安藤直彦、尾崎まゆみ、松田和薫、前田昭子各氏。特選8名、優秀8名。兵庫県知事賞久保盛正氏（高砂市）。小学生特選7名、優秀8名。県芸術文化協会賞中村祐稀さん（天満南小6年）。中学生特選5名。県芸術文化協会賞松本あゆみさん（稲美中学校）、神戸新聞社賞知行紗弥花さん（加古川中学校）。出席者一般46名、小中学生35名。（前田昭子）

【中播】 10月1日、あじさい短歌会は年刊歌集『あじさい』第35巻発行。編集神保原廣己氏。▼11月9～11日、香寺・恒屋川両短歌会は姫路公民館祭りに協賛して短冊出展。▼11月30日、香寺短歌会は年刊歌集『石蕗』第4集発行。編集生田よしえ氏。▼角川全国短歌大会にて真砂晃美氏（水甕）は佐佐木幸綱氏秀逸、馬場あき子氏佳作。吉永明代氏（水甕）は神戸新聞社賞並びにNHK全国短歌大会にて佳

白珠

入社費　五〇〇円
社費（六カ月）　六、〇〇〇円
旧号見本　切手　四〇〇円

兵庫県内支社
神戸白珠の会
宝塚白珠の会
加東支社

〒562－0001　箕面市箕面三－五－八
白珠社
代表　安田　純生

高嶺

昭和2年　早川　幾忠　創刊
昭和21年　二宮　冬鳥　継承
平成8年　井上　生二　継承
平成25年　江島彦四郎　編集
・支部長・運営委員　野瀬　昭二
・在県同人
石橋　光子　井口　通子　大塚　照美
坂田嬉和子　正法地清美　松田　郁子
松田　芳子　福井テル子
△事務局　伊藤　敦子
〒673-0011　明石市西明石町4－7－21
☎(078)927-4439

但丹歌人（隔月刊）

発行　但丹歌人会
代表　斉藤　好正
編集発行人　中島眞喜子
〒669－5229　朝来市和田山町宮438
☎(079)672-2334
運営委員　足立美津子　井上　澄子　尾形　貢
衣川由弥子　高橋　博子　中島眞喜子
平野　君枝

新月

編集発行人　筒井　早苗
発行所　奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西二－六－三〇
☎(〇七四五)七五－六七〇〇
芦屋支部
西村　郁
☎(〇七八)七三三－八五六九
西宮支部
市川美恵
☎(〇七九八)五三－〇四五六

丹生 TANZYO

主張　生活写実を主体として真剣に作歌力を深めようとする集り
創刊　昭和二十一年
代表　兼貞　靖行
〒673－0424　三木市自由が丘本町2－232
☎(0794)83-0803
編集同人　井口通子・林　茂代・藤井貞子・前中　仁・兼貞靖行・上倉佐田子・山中洋子・山本樹一・土居きよ
事務局連絡先　〒673-0533 三木市緑ヶ丘町東2-11-5　山中洋子方
☎(0794)84-0296
振替口座　00950－9－195197

千鳥短歌会

山桜や紅葉に染まる山々。波荒く、また凪ぎる瀬戸の海。渡る千鳥。
取り巻くすべてが歌心を誘う恵まれた環境にある短歌会です。月一回、第一土曜の午後行われる例会は活気に満ち、和気あいあいの楽しい雰囲気です。
代表　山田　恵子
〒656－0426　南あわじ市榎列大榎列七五一ノ五
☎(〇七九九)四二－二〇六二

作。▼1月23日、小畑庸子氏は姫路市立香呂小学校6年生に短歌指導を行う。▼1月29日、市川町新春短歌大会開催。入選青田綾子氏他4名。選歌と選評は小畑庸子氏。▼2月9日、第8回神河町文芸祭開催。短歌の部入賞神保原廣己氏他3名。選歌と選評は小畑庸子氏。　(生田よしえ)

【北播】1月1日、西脇短歌会は『童嶺』54号発行。出詠者45名。▼4月29日、西脇市高松町宝光院にて第35回源三位頼政公奉賛献詠短歌大会開催。応募歌92首。選考は北播各地区幹事15名、講師三村時枝氏。特選第一席岡田笑子氏(加西市)。出席者宮崎修氏他25名。　(松尾鹿次)

【西播】3月22日、南光文化センターにて佐用春季短歌大会開催。春季大会賞尾上節子氏。安藤直彦、船引貴明、菅原艶子、新家イサ子、吉田照子各氏ら35名参加。▼3月30日、短歌俳句合同誌『佐用文化』150号記念特集号刊行。

平成26年度ふれあいの祭典　兵庫短歌祭

作品募集案内

作品　未発表作品1人1首
締切　2014年8月20日(水)当日消印有効
送り先　〒675-1113　加古郡稲美町岡1630　前田昭子方
ふれあいの祭典兵庫短歌祭事務局宛　TEL 079－492－1766
応募料　1,000円(切手不可)※応募者に作品集無料送付
応募方法　応募用紙またはA4の原稿用紙に郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、電話番号、作品1首を明記し、応募料を添えて郵送してください。
選者　兵庫県芸術文化協会、加古川市ウェルネス推進文化振興課、兵庫県歌人クラブ顧問・幹事
賞　文部科学大臣賞、兵庫県知事賞、兵庫県議会議長賞、兵庫県教育委員会賞、加古川市長賞、加古川議会議長賞、加古川市教育長賞、神戸新聞社賞、兵庫県歌人クラブ賞　ほか多数

短歌祭のご案内

◇入場無料◇

日時　2014年11月22日(土)午後1時から午後4時半
会場　加古川市総合文化センター大会議室(東加古川駅より徒歩10分)
内容　入賞作品表彰と講評等
講演　松田和薫氏「印南野の風土記・万葉歌」と万葉歌の朗詠(前田昭子氏)及び、琴(鈴木晴椰氏)と尺八(西無山氏)演奏
主催　兵庫短歌祭実行委員会・兵庫県・加古川市・(公財)兵庫県芸術文化協会・兵庫県歌人クラブ
後援　兵庫県教育委員会・加古川市教育委員会・神戸新聞社

【但馬】1月21日、やぶ短歌会『年刊歌集　山茶花』45号発行。▼1月28日、陰山毅氏、歌集『湯村　浜坂』発行。▼3月15日～4月23日、新温泉町以命亭にて「前田純孝賞入賞作品展」開催。中高大学生の応募421点。選者佐佐木幸綱氏。▼4月12日、新温泉町役場にて前田純孝の会と「心の花」但馬会員によって「短歌放談会」開催。▼4月20日、豊岡市民会館にて但丹歌人会「春の大会」開催。　(安藤直彦)

【淡路】3月、淡路歌人クラブ年刊歌集創刊。参加者73名、各々5首365首を掲載。第30回全淡短歌祭記念誌『歌人の歩み』を公共施設に配布。▼3月29日、淡路歌人クラブ役員会において、第33回全淡短歌祭について協議、それに先立ち改選人事を行う。新代表清水昭男氏(事務局長兼任)副代表谷池さなえ、島田英樹両氏。顧問荒浜悦子、来田務両氏。歌集『給水塔第39輯』『ちどり第18号』『うたつづり4』『花しょうぶ4』発行(各地歌会)。　(来田　務)

(お送り戴いた通信は会報の形式にそって編集させていただいております。)

潮音
大正4年創刊
編集・発行　木村　雅子
〒248-0011　鎌倉市扇谷3-11-4
神戸歌会　石橋　妙子
〒658-0072　神戸市東灘区岡本2-10-3
☎(078)441-3740
幹事　増井　定子　三津野幸代
松田　博子
会計　福島　妙子
監査　三木　雅子

恒屋川短歌会
東　陽子　生田みのり
大塚　好子　大西　豊子
清瀬　輝代　竹川たづる
出来佐恵子　永瀬たつ子
羽岡きよ子
代表　竹川たづる
会計　生田みのり
連絡先
〒679-2121　姫路市豊富町神谷一〇二一
☎(〇七九)二六四-三一一二

津布良(つぶら)
代表　兎田　孝子
発行所
〒661-0046　尼崎市常松一-一九-二九
松村　和子
TEL/FAX (〇六)六四三三-五五三七

長風
鈴木幸輔創刊
会費六ヶ月　六、〇〇〇円
〒353-0004　志木市本町二-一一-四八
金子正男　方
長風短歌会
関西支部　黒崎由起子
〒651-0052　神戸市中央区中島通一-一-二五-一〇二
☎(〇七八)二四二-一四九三

茅花短歌会
短歌文学の鑑賞と作歌についての研修を行い、清新自由で個性に応じた作歌を目指します
毎月第二水曜日九時より
ふれあい交流館で勉強会
講師　松田　和薫
代表　前田　昭子
〒675-1113　加古郡稲美町岡一六三〇
TEL/FAX (〇七九)四九二-一七六六

とべら
(月刊)
代表者　木山　正規
編集・発行者　尼子　勝義
発行所　とべら発行所
〒678-0163　赤穂市高雄1876-1
尼子方
☎(0791)48-0137

西宮歌人協会

顧　問　西本　宗秋
会　長　井上　美地　☎(0798)72-0214
委　員　田中　達子　土本　綾子　益永　典子
芝淵田鶴子　高橋　武雄　河村　公美
伊藤千寿子　黒坂　孟弘　桂　功三
西海　隆子　小林　幹也

歌　会　毎月第3水曜　13時より中央公民館
連絡先　伊藤千寿子　☎(0798)64-1301
歌　会　毎月第2月曜　13時より夙川公民館
連絡先　上松　菊子　☎(0798)71-7337
歌　会　毎月第4木曜　13時30分より越木岩公民館
連絡先　益永　典子　☎(0798)74-2991

姫路歌人クラブ

顧　問　安井　一美
代　表　楠田　立身　水野　美子
副代表　神保原広己
会　計　内海　永子
会計監査　青田　綾子　小松カヅ子
首藤　幸子　三宅　幸子
事務局
〒671－2224　姫路市青山西四丁目五－六
西村　久代方
☎(〇七九)二六七－二七六七

水甕姫路

隔月刊「ひめぢ水甕」編集室

編集委員
東　陽子　阿部　綾子
生田よしえ　小松カヅ子
藤本　則子　楊井佳代子

会計　安田　玲子
〒679－2131　姫路市香寺町犬飼366
☎079－232－2380　小畑　庸子方

西脇短歌会

会　長　藤原　孝雄
副会長　藤中　光代
〃　藤本　勝子
会　計　杉岡　静依

事務局
〒679-1114 多可町中区岸上65－2
安平　八永
☎(0795)32-2172

郷土に生まれ、郷土が育てた短歌誌

文　学　圏　創刊昭和21年

代　表　下村　千里
編集人　青田　綾子
発行人　浮田　伸子
発行所　〒651－2276
神戸市西区春日台1-8-1　浮田方
☎(078)961-5676
編集委員　内山　嗣隆・岸本　寿代
宮脇　経子・山本　圭子
山本　君子・吉田千代美
会　計　吉永久美子

夢前短歌クラブ

浅野実知子　大地　芳子
尾上田鶴子　鈴木みさ子　谷口千鶴子　尾上　幸子
鳥越　英子　那倉　節子　則政　昌子
東影　清子　山松　善子
〒671－2121　姫路市夢前町宮置一四四
尾上田鶴子
☎(〇七九)三三五－〇四三三

白　圭

編集委員
内海　永子
鎌谷　克子
川上千鶴子
塩澤　文子
首藤　幸子
発行所
〒679-4003　たつの市揖西町小神297-1
内海永子方
白圭社
☎(0791)63-4734

ポトナム姫路支部

＝地区代表＝

（姫路）　（佐用）
西門　和子　新家　イサ子
羅川　範子　吉田　照子

連絡先
〒679-2422 神前郡神河町貝野297
神保原廣己
☎(0790)32-0903

林間阪神支社

伊藤佐重子・池田　好子
石黒　陽子・内井　幸子
倉橋　愛子・芝淵田鶴子
野田　富子・南　操子
吉村すゑ子
〒662－0944　西宮市川添町一－一四
芝淵田鶴子方
☎(〇七九八)三六－一九〇七

波濤神戸

発行人　保田ひで
発行所　波濤神戸支部
連絡先　〒653-0852
神戸市長田区山下町1－5－15
保田　方
☎(078)612－9294

保田　ひで
三好弥寿子　田渕　阿部　富岡　立花　尾末
幸子　道子　経子　貞子　知子

創刊　昭和二十一年十一月

美加志保短歌会

委員　藤木千恵子
松尾　鹿次
〒675－1371　小野市黒川町五七三
編集兼発行人　松尾　鹿次
☎(〇七九四)六二－二八四六

玲　瓏

［玲瓏の會］

塚本邦雄詩歌アカデミア迫真的想像力の
飛翔を期するサンボリスムの殿堂

呈送稿要領見本誌
御希望の方は
〒262-0026　千葉市花見川区瑞穂2丁目1－1
ガーデンプラザ新検見川2－906
塚本青史方
Tel/Fax 043-211-6704
http://reir.blue.coocan.jp

東加古川短歌会

水野　美子

郡　英子　小西　春見　佐藤　咲子
須鎗みち子　谷村　孝子　中田　治子
福山　祥子　水野　美子　村田　弘子
矢内　温代

水甕明石支社

左記で、毎月歌会を開いています
お気軽にご参加下さいませ

◇第一土曜日　午後一時より
◇場　所　人丸堂三階
◇連絡先　向山　明子

〒673－0865　明石市大蔵谷清水五四二
一－三一四
☎(〇七八)九一四－〇〇七八

昭和八年創刊　六　甲

発行所代表　田岡弘子
〒673－0845　明石市太寺四－一－三〇
☎(〇七八)九一二－二六七三
会計室　加西市網引町　小田弥生
運営・実務委員
竹本美屋子　志方　弘子
石原　智秋　牧野　秀子
西川　和子　黒田　智子
村瀬　美雪　黒川　明子

年刊歌集第54集作品募集案内

作品　十首（過去一年間の自作、既発表・未発表問わず）・題を付す

様式　四百字詰原稿用紙（A4判）二枚を用い、楷書で明記・右肩を綴じる
一行目に①題名　②氏名（題名の下に書き、**必ず「ふりがな」**を付す）
二行目はあけ、三行目から③作品十首　④二枚目末尾に所属結社または団体名・郵便番号・住所・電話番号を明記

かな遣い　新・旧いずれかに統一し、歌稿右肩欄外に**新・旧**の別を明記

参加料　三千円（うち印刷費二千円＋運営費千円　歌稿に同封して送金
―切手代用不可）

資格　問わない（会員・非会員の別なく誰でも参加できる）

締切　二〇一四年八月二〇日（当日消印有効）

送付先　〒六五八―〇〇二七　神戸市東灘区青木二―二―一―六一七
三津野幸代方　兵庫県歌人クラブ年刊歌集刊行委員会あて
電話〇七八―四三一―八六六五

伝統文化体験フェスティバル
（於）兵庫県公館

短歌をたのしく

生田よしえ

昼食時と重なり案じられた参加者も次第に増え、小学生から高齢者まで十四、五名となった。先ず楽しんで頂くことを頭におき、歌の基本と歴史を簡単に述べる折に「君が代も短歌」とつけ加えると会場の緊張がほぐれてきた。和やかな雰囲気のなかで実作に移る。苦吟している人に話しかけたり助言をしているうちに、次々と作品が提出される。ラーメンが好きと詠む小学生、若い人の宿酔の歌や労働の現場での歌。白梅を詠って季節感あふれるものの他、今時の健康志向を反映したもの等、皆さん初心でありながら実に伸びやかに作られていた。

とりわけ注目したのは高齢と思われる女性の口紅を題材にした歌の新鮮さであった。老いても失われていないしなやかさが好ましく、こうした出会いの中でのなごやかな七十分であった。

五七五七七

益永　典子

指導の益永、生田、安藤各氏

今日は二日目、親子連れ二組も含め、老若男女ほどよく混ざって十名余りの参加者。実作の前に、簡単なレクチャーとゲーム。短歌には季語も要りません、決りは五七五七七、三十一文字であることだけ、これを定型と言います、と強調。短歌の一部を空白にして、自由に埋めてもらうゲームでは、子供さんが気軽に答えてくれてスムーズに進行。初体験、少し経験あるらしい方といろいろだったが、実作に入ると次々に作ってくれて、ボードに書き出す。即、最小限に添削。全てで七十分、忙しすぎて目が回りました。出詠歌から二首、

・はるの日にはじめてかいた水ぼくが水せん二本とろうばいの花
・届いたか？オトナの想いのチョコレート黒から白へと移る甘い香

◇余滴◇

新企画により読み応えのある紙面ができ上がりました。9～12頁を森嶋が、他は山中が担当致しました。ご感想をお待ちしております。（森嶋・山中）

平成25年度収支決算報告書

自　平成25年4月1日　～　至　平成26年3月31日

収入の部　（単位　円）

費　目	摘　要	金　額
前年度繰越金		2,162,273
会　費	1、000×676口	676,000
結社広告費	3、000×49口	147,000
歌会広告費	1、000×51口	51,000
年刊歌集余剰金		27,541
ふれあい短歌祭余剰金		281,209
預金利息		142
寄　付	土　居　正氏	10,000
寄　付	三津野　幸代　氏	10,000
〃	矢　内　温　代　氏	10,000
〃	匿　名　氏	10,000
合　計		3,385,165

支出の部

費　目	摘　要	金　額
会報費	No.189号　190号	589,942
通信費	事務連絡	48,110
交際費	協賛金・弔慰金	38,226
幹事会費	会議費	34,702
事務局費	渉外会場費交通費	104,510
消耗品費	コピー・宛名シール他	18,070
シンポジウム25	補填	237,866
夏休み親子体験フェアー	補填	12,000
伝統文化体験フェスティバル	補填	15,650
新年会	補填	12,650
新人賞	平成24年度後期補填	98,375
新人賞	平成25年度前期補填	8,205
次期繰越金		2,166,859
合　計		3,385,165

会計　池本　登代子
平成26年3月31日
監査　小畑　廉子

上記の通り相違ありません